

北九州市立大学法政論集第47巻第3・4合併号(2020年3月)抜刷

エッセイ

シンガポール史跡巡りツアー名物ガイド 顔 夕子

——「日本人として許してもらって生きているから」——

田 村 慶 子

エッセイ

シンガポール史跡巡りツアー名物ガイド 顔 夕子 —「日本人として許してもらって生きているから」—

田 村 慶 子*

筆者（田村慶子）は、2019年7月から9月の3か月間シンガポール国立大学客員研究員としてシンガポールに滞在した。その主な目的は「シンガポール現代史のなかの日本人：在シンガポール日本人への聞き取り調査から（Japanese in the Singapore Modern History：Voices of Long-Term Japanese Residents in Singapore）」というプロジェクトを進めるため、長期にシンガポールに滞在されている日本人28人にインタビューを行い、その方のライフヒストリー、その方が感じられる日本とシンガポール関係の変化、在シンガポール日本人社会の変容、シンガポール人の日本人を見る眼などについてお話をうかがった。

お目にかかった28人の中で筆者に最も強烈な印象を与えたのが、「シンガポール史跡巡りツアーの名物ガイド」顔夕子さんだった。その波乱に満ちたライフヒストリーを何とか書き留めておきたいという強い衝動に駆られた筆者は、お名前を出してエッセイを書くことを夕子さんに了承いただいて、6時間以上にも及ぶインタビューを行った。

顔（今村）夕子さんは戦前の鹿児島で1938年に生まれ、教育者の父に厳しくしつけられ、病弱な母、幼い弟と妹の世話をする少女時代を過ごし

* 本学法学部教授

た。東京で出会ったシンガポール人男性に会うためにシンガポールに渡った直後、仕事を求めて偶然に飛び込んだ旅行会社でガイドとなり、慰霊にやってきた元日本兵の涙を見て、ガイドを一生の仕事として生きることを決心した。

ガイドブックもなく、ガイドという職業そのものもまだ確立していなかった1960年代末に、元兵士たちの声を伝えるという独自の史跡ツアーを作りあげていった。やがて、そのツアーは予約開始とともに即完売し、なかなか予約が取れない人気ツアーとなっていく。

もっとも、そのガイド人生だけでなく、私生活もまた波瀾万丈である。鹿児島から東京に来たのは家出であったし、「運命の人」であるはずのシンガポール人は、「飲む、打つ、買う」の放蕩生活を送り、家庭を全くかえりみななかった。日本占領時代の辛い記憶を心にも体にも刻んで暮らすシンガポール人が多かった1960年から70年代、彼女も息子もシンガポール人の反日感情を体験した。

このエッセイは、顔夕子さんのライフヒストリーを、現代シンガポールと日本の関係とともに辿る。また、夕子さんの史跡ツアーの主な訪問地と、彼女の独自の説明も書き残した。元兵士はほとんどすでに鬼籍に入った今、彼女のようにその方々の声を直接聞いて、それをお客さんに伝えながら史跡ガイドをする、というユニークなガイドはもういないからである。

鹿児島少女時代と上京

顔夕子さんは1938年に鹿児島県始良市で、今村孜 (いまむらつとむ)さんとフカエさんの長女として生まれ、歳の離れた妹と弟がいる。元校長だった父は特に長女の夕子さんには厳しく「お前がしっかりしないで、家族はどうなるんだ」と言われて、よく殴られ、叩かれた。「九州という土地柄もあったのだろうが、なぜ自分だけがしっかりしなければならないのか」がわからなくて、殴られても我慢して決して泣かなかった。

でもトイレで1人で泣きました。ずいぶん後になって、「父は娘が涙を流さないで、いっそうカッとなって殴った」と言っていました。父に似て、自分は頑固なんだと思います。

また、父は「生きることが使命」という信念の人でした。「戦争に行ってもその場で踏ん張れ」と言って兵を送り出した人、死ぬのは美德だと思わない人。当時としては稀な考え方の人でした。

母が病弱だったために、夕子さんは妹と生まれたばかりの弟の世話をしました。中学の時は弟を背負いながら学校に通っていたが、「弟は小さかったので、そのときには苦しいとか、辛いとかとは思わなかった」が、今は「よおやったなと思います」。

中学の養護の先生が弟を背負っている彼女をよく助けてくださり、授業の合間に弟が背中で眠ってしまっていた時には、保健室の布団を貸して下さることもあったという。

「戦争に行ってもその場で踏ん張れ」という父の性格は、シンガポールで踏ん張って自分の人生を切り開いていった夕子さんの頑張りの礎を、周囲の人に助けられながら母と弟の世話をした少女時代の体験は、後にシンガポールで土になった兵士と「からゆきさん」に注ぐ優しいまなざしを作っていた。

高校を卒業後、鹿屋にあった鹿屋航空隊という航空自衛隊に就職し、通信課のオペレーターとして働き、実家の母の看護をしながら生計を立てることができるようになった。仕事をしながら、火をおこして薪でご飯を用意して母を看病する日々が続いた。頑張り屋の彼女は、通信オペレーターの「有紐(ゆうひも)」と「無紐(むひも)」と呼ばれる資格を取得したし、時間を見つけて覚えたダンスの指導者の資格も取った。

やがて、鹿屋航空隊の自衛官に恋をした。初恋だった。でもうまくいかずに別れたので、そのまま鹿屋にいるのがいやになり、また家のことも忘れてすべてをやり直そうと決心し、貯金をすべて持って何と家出して上京

してしまった。21歳だった。

「有紐」「無紐」の資格が役に立って、東京神田で家庭科教科書を出版する会社の電話交換手の仕事を得た。貯金をすべて仕事探しに使ってしまったので、お金がなかった。先輩の女性がお昼を食べない夕子さんを見かねて、よくお昼ご飯をおごってくれた。嬉しくて涙を流しながらご飯を食べた。その人は会社に鍋を持ってきてご飯を作って食べさせてくれたこともあった。お金を稼ぐために、自分の電話交換手のシフトをすべて午前に入れてもらい、昼からは新宿のダンスホールでダンスを教えたり、夜はダンスホールでお酒を出したりするアルバイトを始めた。ここでもまた、故郷で取得したダンス指導者の資格が役に立った。

初恋の人、そして父との再会

ある夜、アルバイトしていたダンスホールに鹿児島で別れた初恋の人が入ってきた。顔を見るなり、胸が高鳴って叫び声を出すほど驚いた。相手もすぐに自分のことがわかったようで、お客さんがいなくなる頃に一緒に踊った。

鹿児島では全くダンスが出来なかった人が、いつのまにかとても上手になっていました。いつ踊れるようになったのでしょうか。今頃どうしているのでしょうか……。

束の間の、一瞬の初恋の人との再会であった。

またある日、電話交換手の仕事中に外線から突然懐かしい声が聞こえた。「中村社長お願いします」一鹿児島訛りの父の声だった。思わず叫んだ、「お父さん、夕子です！」。

父は鹿児島県代表教員として教科書選定のために上京したのだった。その夜、父と他の鹿児島の先生たち、社長と一緒に食事をした。

世の中にはこんな偶然があるんですね。本当に驚きました。

「運命の人」との出会い

オリンパスなどと取引のあるシンガポールのイギリス系企業から研修生として来日していた顔英意 (Gan Eng Joo) 氏と知り合ったのは、初恋の人と再会したダンスホールだった。研修生全員をオリンパスの担当者がダンスホールに連れてきて、他の研修生が楽しげに騒いでいる中、彼はじっとしていた。「おとなしい人だな」というのが第一印象だったという。

また、友人が主催した「琴の発表会」の切符の配布を頼まれたので、他の研修生や会社の人にも誘ってくださいと彼に切符を渡してお願いしたら、研修生たちと一緒に来てくれた。そのときも「おとなしい人だな」と思った。ただ、当時は彼のお父さまが亡くなったばかりだったようで、お父さまの話をするときオイオイと泣き出してしまい、「優しい人」だと感心したという。

彼に強い興味を持ったのは、自分の父には6人の妻がいて、自分の母はその5番目だと話してくれた時からで、「まあ、何てことだろう、昔のサムライの家みたい」と思った。「シンガポールに遊びにおいでよ」と言われたので、

軽い気持ちで、どんなとこなのか見てみよう、何とかなるさ、駄目なら帰ろうと思っていました。まさかそれからずっと住むことになるとは思いませんでした。

渡航するための痛い注射のことを思い出して、

当時シンガポールに行くときは予防注射を2回しなければならなかった。3人の友人とシンガポールに行くことになっていたんですが、一回目の注射があまりに痛かったので2回目の注射に来たのは自分だけだったんですよ。

顔英意氏の父は、中国の南部の福建省からシンガポールに移住したブラ

ナカンの一族で、戦前から広大なゴム園を有していた。プラナカンとは、多くの移民がシンガポールにやってくる19世紀中期より早い時期に移住し、現地女性との通婚などによって土着化した移民で、インド系やアラブ系もいるがほとんどは中国系である。地元には詳しい彼らをイギリスはビジネスのパートナーとしたため、経済的に豊かになったプラナカンも多い。なお、シンガポール初代首相リー・クアンユー氏もその妻もプラナカンである。

「ここはお前の家だ、玄関はいつも開いている」

両親にシンガポール行きを報告するために帰省した。「東京で知り合った男性に会いにシンガポールに行く」と言うと、母はシンガポールがわからず、「北海道あたり？」と尋ねて、「自分もよくわからないけど、その辺り」と答えたが、夕子さん自身もシンガポールがどこにあるのか、よくわかっていなかったという。

ただ、元校長だった父は日本軍政時代のことを知っていて、「許さない」と言うと泥酔して寝室に入ってしまう、「駄目だ、許さない」と寝言でもつぶやくほど反対した。

1942年2月から45年8月にシンガポールを占領した日本軍は、シンガポールを「昭南島」と名付け、中国系（華人）の成人男子を大量虐殺するなど、住民に多大な苦しみを与えた。教育者だった父はそれを知っていて、娘がつらい思いをするのではないかと心配したのである。

早朝にハイヤーで空港に行くときは父に黙って行こうと思ったが、すでに父は起きていて夕子さんに向けた一言は、「忘れ物はないか」。

それを聞いたら急に悲しくなってしまう、「お父さん、私行きません」と言うと、父は「行って来い。お前は何でも我慢するからよくないんだ、いつでも戻ってこい。ここはお前の家だ、玄関はいつでも開いている」と送り出してくれた。ハイヤーに乗った後は家を振り返れなかった。父に「よく気張ったな」と言われるまでは帰れないと思いました。

日本の一般市民が職業上の理由や会社の都合ではなく、個人旅行として自由に外国へ旅行できるようになったのは1964年4月である。そのわずか3年後に、結婚するかもしれない相手に会いに、夕子さんは1人でシンガポールに発った。覚悟を決めたシンガポール渡航だったはずではあるが、悲壮感を感じられない。「何とかなるさ、駄目なら帰ろう」という言葉から、鹿児島から家出したときと同じような、失敗を恐れず、「どこに行ってもそこで踏ん張る」前向きな生き方がうかがえる。

「運命の人」は「飲む、打つ、買う」の人だった

当時はまだ珍しい空の旅は、とても優雅だった。日本航空(JAL)がシンガポール線を就航したのは1965年2月、それからまもなくの若い女性の1人客は、とても目立ったはずである。

飛行機の客は7-8人、お客さんと同じくらいの人数のステewardessさんがいたんですよ。食事のサービスのときはみなさん振袖に着替えて出てこられました。

飛行機がシンガポールに到着するときは、空港にちゃんと顔英意氏が迎えに来てくれているのか不安になって涙が止まらなかったが、客室乗務員(当時はステewardess)の1人が「大丈夫、シンガポールはいいところですよ」と慰めてくれたという。

夕子さんが降り立ったのは現在のチャンギ国際空港ではなく、滑走路1本だけという小さなパヤレバー空港で、その当時周辺は一面のヤシ畑だった。迎えに来てくれた英意氏が運転する車で、空港から市内に向かう途中は、ニッパハウス(ヤシの葉で屋根を葺いた簡単な家)のカンボン(マレー人の村)が続いていた。ここで生きていけるのかどうか、また不安に思った。

途中に「白い4本の大きな柱」があり、綺麗だなと思った。その4本の

柱の周りは何もない広い空地だった。英意氏に「これは何?」と尋ねたら、言葉を濁された。この綺麗な4本の柱が、6000人から4万人といわれる日本占領時代に虐殺された人々の霊を慰める「日本占領時期殉難者慰霊塔」だと知ったのは、ガイドの勉強を始めて間もなくのことだった。

なお、この慰霊塔が建ったのは1967年2月、夕子さんがシンガポールに来るわずか5か月前のことだった。

パシパンジャン (シンガポール南西部の海沿いの場所、148ページの地図参照) の大きな長屋のような家に到着したら、大勢の人が待っていてくれた。英意氏が「This is my sister, this is my brother... (これが姉で、これが兄・・・)」と並んでいる人々を紹介し、brothers (兄や弟) とsisters (姉や妹) は何と全部で40人以上もいた。



慰霊塔 (血債の塔とも呼ばれる)

最初はシンガポールでは女はsister、男はbrotherって言うのかなと思ったら、みんな義理の兄弟姉妹たちだったんですよ。彼のお父さまには奥さんが6人いることは聞いていたが、それぞれに8人の子どもがいるなんて・・・。また、5人の義理の母を、「This is the first wife, this is the second wife... (これが最初の妻、これが2番目の妻・・・)」と紹介してくれたんです。

「もし私と結婚したら、あなたもこんなふうにかくさんの奥さんを持つ?」と尋ねたら、「君次第だよ」という返事で、何て人かと思いました。

結婚するかもしれない「運命の人」は、「おとなしくて、父親思いの優しい人」ではなかった。夕子さんの帰りのチケットを「ちょっと見せて」と持って行ってしまい、何とお金に変えて賭博か何かに使ってしまったの

である。

英意氏が、金遣いが荒く家族を顧みずに「飲む、打つ、買う」に明け暮れる人であることはすぐにわかったが、帰りのチケットもなく、お金もないので、どうしようもなかった。

当時の英意氏はイギリス系の会社の幹部で、会社から車を支給されるほど厚遇されていたが、給料を家に持って帰ることは一度もなかった。夕子さんは「当分は帰れない」と思ったという。

さらに、冷たい仕打ちも待っていた。

パシパンジャンの大きな家のすぐ近くの二階建ての家に、夕子さんは連れて行かれた。「ああ、よかった、あんな大勢と一緒に住むんじゃないんだ」と安心したのも束の間で、その家には英意氏の実の兄弟姉妹も住んでいて、英意氏が家に食費を入れないので、兄弟姉妹たちからいじわるされたのである。下の階にあったベッドにちょっと横になっていると「これは誰れが買ったベッドで、英意が買ったものではない」と言われて、そのうちに下に降りられなくなってしまい、水道も使わせてもらえず、朝食も昼食も抜きになってしまった。

私が日本人だからでなく、お金なんです。お金を入れないからいじわるされた。お金が大事な家柄なんです。でも、ひもじい思いをしていると、夫の実の母がパンやご飯をそっと持ってきて、食べさせてくれた。母は英語が話せず、広東語しか理解できなかったのもので、自分の口を開けて食べる動作をしてから、パンやご飯を渡してくれたんです。

深夜マージャン帰りの主人がチキンライスを買ってきてくれて、ようやく食事にありつけるんです。一日一食だからもうお腹が空いて仕方がない、お金はないし、言葉もわからない。とにかく日本語が話したくて、道端で犬に話しかけたらワンワンと答えてきて、何て日本語のうまい犬だろと思ったりしました。

英意氏が実家にお金を入れないので、二人はその家を追い出され、英意

氏の父の3番目の妻の家に居候させてもらったこともあった。居候の身である二人に、何とこの家主の異兄弟がお金の無心をしたこともあった。

「名物ガイド顔夕子」の誕生

こんな毎日を送っていたのでは頭がおかしくなると思った夕子さんは、何とか仕事をしてお金を稼ぎ、日本に逃げて帰ろうと考えた。お金がすべての家柄だとわかったので、稼いで見返してやろうという気持ちもあったという。

シンガポールに来て4か月後に、主人に黙ってパシパンジャンからバスに乗って、東京銀行に駆け込んで「何か仕事をください、掃除でも何でもいいです」と頼み込んだんです。東京銀行なら日本語で働けると思った。でも「人を雇ったばかりだからね」と断られてしまった。ただ、そのときに、対応してくれた小柄な日本人支店長が、「この下のビルに旅行会社がある」と連れてってくれたんです。シンガポールにたった二つしかない日本のツアーを扱っている会社で、一つは外国の言葉を使っている大きな会社でしたから、私はもう一つの会社を紹介してもらいました。

そこは、日本人の社長と沖縄出身の年老いたドライバーさんの二人でお土産屋さん兼旅行会社を営んでいるところでした。その場で採用が決まり、月150シンガポールドル（1シンガポールドルは現在約78円＝筆者注）の給料を頂きました。当時150シンガポールドルあれば、二階建ての一軒家を借りることができくらいでした。大家族の家から出たくて仕方なかったので、跳んで喜びました。主人も働くことを喜んでくれました。

社長は長野県の人で、終戦後に一度故郷に戻ったものの、生活が出来ずに再びシンガポールに渡り、旅行会社とお土産屋を開いて成功した人で

ある。

会社のドライバーは継母に沖縄の漁村に売り飛ばされ、潜水して貝を獲らされたために一方の耳が聞こえなくなった人だった。夕子さんと仲良くなると、子どものときに実母が亡くなり、継母となった人が自分と妹を虐待しただけでなく、他の人に自分たちを売ったので、妹をおぶって逃げたがすぐに捕まってしまったこと、召集令状が来て南方戦線に送られたが途中で脱走してシンガポールに来たことなど、辛かったことを涙ながらに話してくれた。小柄で小太りの、とてもいい人だったという。

戦後から1960年代末のシンガポールには、こんな日本人たちがたくさん生活していたんです。

「ガイドをするつもりはなかった」と夕子さんは言う。旅行会社で事務の仕事をして、とにかくお金を稼いだかった。楽しみは、お客さんが持ってきた日本の新聞をもらって日本語を読むことで、「日本語を読めるのが、ただ嬉しかった」。

会社の事務所にはいろんな日本人の老人たちが集まってくる。どこからこんなに昼間から酒盛りをしに集まってくるんだろうと思っていましたら、その人たちは、戦争中にイギリス軍に捕虜として捕まって脱走して命からがら何とか生き延びた人や、戦後に戦犯として逮捕されたものの処刑を逃れた人たちなんです。お客さんはぼつんぼつんと来てはいましたが、社長が酔っ払って客を追い出してしまうんですよ。

でも、お客さんが来るので、沖縄出身のドライバーさんと私の二人で、「社長！私たち二人で案内してきます」と言ったわけですよ。でも、何にもわからないわけ。「あのビルは何ですか」という質問に「さあ、何でしょうね」と答えていましてね（笑）。私の方がその頃の日本のことをお客さんに尋ねていくくらいです。

史跡ツアーを始めたのは、パシパンジャンからクレメンティという西の

方に引っ越した1970年頃で、近くにあった日本人小学校の先生たちに頼まれたことがきっかけだった。夕子さん、元日本兵が会社で酒盛りをしているところに首を突っ込んで、日本とシンガポールの歴史を聞いて回った。社長から「人が楽しく飲んでいるのに、自分で勉強しろ！」と言われたが、そんな資料はどこにもないので、彼らに聞くしかなかった。

そんな夕子さんにガイドとしてシンガポールで生きる人生を選ばせたのは、戦死した仲間の慰霊にやってくる元兵士との出会いだった。

1970年代に入って日本は経済成長して生活が安定してくると、その昔銃を担いできた人たちが、慰霊でシンガポールに来るようになったんです。農協ツアーも多く来るようになりました。

当時シンガポールはジョホールまでどこへいってもゴム園。慰霊に訪れた部隊によって目的地のゴム園の場所が違いましたので、行きたい場所が違うんです。指定された場所に連れて行くと、そこにいっぱいあるゴムの木の中で一本だけを指して、「おい、あれじゃないか」と1人が言うわけです。仲間が「そうだ、そうだ」と言って、その木の根元の土をマッチの箱に入れて大事に保存する。何をするのかと尋ねたら、「我が隊の隊長さんがあの木の根元にすがって倒れた場所だ」そして、「隊長殿、隊長殿とすがっていると、くかまうな、進め！」とおっしゃったその場所だ。ここで隊長殿が亡くなった」と言って、みんなが男泣きに泣いていた。

ずっと広がる同じようなゴム園のなかで、どうして隊長が倒れた場所が特定できるのか、よくわからなかったが、ゴム園の入口付近の風景が記憶と一致したのかもしれない。とにかく元兵士たちが「ここだ」とおっしゃるので、私はその言葉を信じました。

当時イギリス軍に日本の無線がたびたび盗聴されていたらしく、ゴム園にいた部隊は正確に攻撃された。だから、日本兵が進むゴム園は死体が

溢れ、「死のゴム園」になった。その元兵士たちの涙を見て、生半可な気持ちでガイドは出来ないと覚悟を決めた。この人たちの気持ちを何とか他の人に伝えたい、ガイドとして生きていこうと思ったんです。

資料が何もなかったので、元兵士の話をメモし、また、道路が混んでバスが進まないときはマイクを渡してひとりずつそれぞれの思い出を話してもらいました。その話を覚えて、次のツアーの時に話すんです。お客さんから「ガイドさん、あんた戦場にいたみたいだね」と言われたりもしました。高嶋伸欣先生*の資料を知ったのはこの頃で、何度も何度も読んで勉強しました。

慰霊に見えた方たちは帰り際に、自分は高齢だからこの地にはもう来られないだろうと、シンガポールの大地に最敬礼をして、泣きながら同胞に最後のお別れをされるんです。ほとんどの方がそうでした。何をお願いしたんですかと尋ねると、「シンガポールの大地にわが戦友を末永く抱き留めてくださいとお願いしました。そしてシンガポールがどんどん発展するように日本から祈っています」と、おっしゃいました。

毎年のようにツアーに来るお客さんもいて、顔なじみになり、「またあんたがガイドか、ガイドはあんたしかいないのか」と言われて、「お客はあんたしかいないのか」と返すような、親しい仲になったお客さんもいました。

このように顔なじみになった方から日本に招待され、静岡や山梨の地元テレビで夕子さんが紹介されたこともあった。

「シンガポールの史跡に詳しいガイド」として夕子さんの名が知られるようになるまで、それほど時間はかからなかった。



ガイドをする30歳代の夕子さん
(夕子さん提供)

日本人会が夕子さんに「日本人会主催史跡ツアーのガイド」を初めて依頼したのは1971年である。シンガポールに滞在する日本人は1970年代から増え始め（1970年は約2000人、75年は約5000人）、70年には日本人小学校に中等部が併設された。それまでの商社や製造業に加えて、伊勢丹やヤオハンという日系のデパートもシンガポールに進出し、日本人コミュニティが大きくなり始める時期だった。同時に、豊かになって生活が安定した日本人が慰霊のため、また旅行のためにシンガポールを訪れ始めた。

ただ1人の日本人史跡ガイドの夕子さんに、日本の旅行社からも日本人会からも仕事が舞い込むようになった1970年代初め、夕子さんはオーチャード通に日章旗がはためいているのを見た。

伊勢丹が来る少し前でした*。オーチャードを歩いていたら日章旗がはためいているビルがあったんです。ああ、たくさんの日本人がいるんだと嬉しくなって、思わず跪いて合掌したんです。涙があふれ出しました。道行く人はみな驚いてしまって、慌てた主人が「妻は日本人なので」と周囲の人に言っていました。

*高嶋伸欣（たかしまのぶよし）先生

東京教育大学附属高等学校（現・筑波大学附属高等学校）社会科教員時代に、日本の近現代史に関する教材研究をきっかけとして、1975年より現在まで東南アジアの近代史をたずねる「マレー半島戦争追体験の旅」などを主宰している。また、マレーシアとシンガポールにおける日本軍の住民弾圧の体験者の証言を集め、記録に残している。『旅しよう東南アジアへー戦争の傷跡から学ぶ』岩波書店（岩波ブックレット99、1987年9月）など多数の著書がある。現在は、琉球大学名誉教授。

*伊勢丹のシンガポール進出は1974年。

「大和撫子ここにあり！」

もっとも、史跡ツアーのガイドに生きがいを見つけたのは、ご主人との不和が続いて家に帰りたくなかったからでもあった。

子どもが生まれて正式に結婚しても、英意氏は相変わらず「飲む、打つ、買う」の生活で、家庭を全く顧みずに家にお金を入れなかった。夕子さんは少しでも大きな家に住めば、夫が家に帰ってくるのではないかと思って、大きな家を買ったが、夫はちっとも変わらなかった。夕子さんが遅くなると、家に鍵を掛けてしまうこともあった。

さらに、夕子さんにまでお金をせびるようになった。

お金を渡さないと、殴る、蹴るの乱暴をするんです。小さかった息子が、「ママー、早くお金を上げて、痛いから早く早く！」と泣きながら言いました。

夫を殺してやろうかと思ったこともありました。でもそんなことをしたら、子どもが可哀そうだし、第一、何でこんな人を殺して自分が牢屋に入らなければならないのかと思うと、バカバカしくなって殺す気も失せました。

でも唯一感謝しているのは、子どもを授けてくれたこと。子どもは本当に可愛かった。この子がいるんだから、帰国しないで頑張ろうと思いました。

ガイドの仕事と1人息子は、夕子さんの「生きる希望」になった。ただ、早朝に空港に迎えに行ったり、深夜に空港にお客さんを連れて行くことも稀ではなく、寝顔しか見れない日々もあった。

でもガイドを天職と決めたとし、仕事をしないと生きていけないので、毎朝出かけるとき「大和撫子ここにあり！」と胸を張って家を出たんです。

日本人が周りにほとんどいないなかで、日本人として胸を張って襟を正して生きていこうという強い決意をした夕子さんだった。

誰かが息子に「ママはいつもどこにいるの？」と尋ねたら、「ママがどこ

にいるのか、僕は知らない」と答えるくらい、私はいつも不在だったんです。でも主人の母に世話してもらった。息子はおばあちゃん子でした。

一緒に暮らしていた英意氏の実母はとてもいい人で、夕子さんのことをいつも心配してくれた。生まれた息子の世話も、メイドさんと母に任せました。

母は神様仏様みたいにいい人でした。だから、母が亡くなった時には泣いて、泣いて……。他の人は私を慰めるために泣けなかったくらいでした。生きているときに、自分の一番大切なものをあげたかった。泣きながら、身につけていた真珠のネックレスを引きちぎって、土葬される母の遺体に入れました。あまりのことに、みんなびっくりしていました。

夕子さんは英意氏と結婚はしたものの、式は挙げていない。それを見かねたユーラシアン（ヨーロッパ人とアジア人の混血）の友だちが、二人を自宅に呼んでカレーを作って祝ってくれた。その人が自分のドレスを貸してくれて、「写真だけ撮れ」と勧めてくれた。でもその人はとても大柄な人だったので、ドレスもとても大きくて背中でギュッとドレスを引っ張って、急いで写真だけを撮った。

初の里帰り

当時は結婚して2年経たないと出国できなかったもので、子どもが2歳の時に、息子連れて初の里帰りをした。

子どもは英語しか話せなかったもので、どうしようかと思ったんですが、父がウマになって背中に子どもを乗せて遊んでくれました。日本はそのとき冬で、子どもに雪を見せたかった。でも鹿児島は雪がなかなか降らない。そしたら父が子どもに長靴を履かせて、早朝に田んぼの霜を踏ませたんです。霜をバチャバチャと踏みつけて飛び回った子どもは、寝て

いる私を起こして、「マミー、鹿児島は雪は下から降るんだよ」と大喜び。父は教育者だなと感心しました。

その思い出があるのか、大きくなった息子は自分の子どもたちをよく日本の田舎に連れて行って、自然のなかで育ったトマトやジャガイモ、ピーマンを見せたり、収穫させたりするんです。シンガポール育ちの孫はマーケットの熟した野菜しか知らないから、まだ青いピーマンを引きちぎったりしていますが、そんな田舎体験をととても喜んでいます。

2歳の息子連れて故郷に帰った夕子さんは、実家のご両親に夫のひどい仕打ちも兄弟姉妹のいじわるなどもいっさい話さなかった。ご両親は、娘が元気でシンガポールに暮らしている、それに可愛い孫が出来たと喜んでくださった。お父さまは「夕子、よく気張ったな」と思って、ひたすら孫を可愛がってくださったのである。

「ママが日本人だから」

息子が幼稚園に行っていた1970年代はまだ対日感情が悪かった。イギリス人も隣近所にたくさん住んでいた。息子は母親が日本人だということで毎日いじめられて帰ってきた。日本人の子どもと言われて馬鹿にされると、「ノー、アイアムシンガポーリアン（違う、僕はシンガポール人!）」と叫んでいた。

もっとも、夕子さんは、最初はいじめられていることを知らず、どうして毎日服を汚し、泣いて帰るのだろうと思っていた。ある日いつものように、息子が泣きながら帰って来たので「泣く子は家に入れません」と言ったら、玄関の外に出て「ママ、楽しかったよ」と無理に笑顔を作って再度家に入ってきた。改めて「なぜ泣いて帰ってくるの、言っでごらん」と促すと、消え入るような声で「ママが日本人だから」。

なぜそんなことをするのかと腹が立ったが、歴史を知ってからは、私が

日本の代表として彼らの怒りを受け止めていこうと考えることで、何だか楽になれたんです。自分が外に買い物に行くと、近所の人々が「日本の女が来た」とよく言っていたし、道で近所の人に水を掛けられたこともありました。でも私が水をかぶったまま合掌していたら、それきりかけられなくなりました。

夫との別居、息子の進学、夫との再会

シンポール人男性は18歳になると、2年から2年半の兵役義務がある。夕子さんの息子も18歳で徴集され、その年に徴集された若者全員を集めて政府が主催する式典には、夫婦二人で参加した。ただ、家に帰ると夕子さんはフィリピン人メイドにそと「別宅に引っ越すから」と告げ、夫の身の回りのもの以外のほとんどの荷物を持って、英意氏には何も言わずに別宅に移った。別居である。この別宅も、もちろん夕子さんがガイドで稼いだお金で用意した家であり、息子には家を出ることは事前に話しておいた。

当時は、鹿児島のお母さまも引き取って一緒に暮らしていた。鹿児島のお父さまが地元の選挙で忙しく、病弱な妻の世話が出来なかったため、夕子さんが連れてきたのである。お母さまには夫と別居することは全く話さず、適当にごまかして別宅に連れて行った。

実家のお母さまはその後シンガポールで暮らした。言葉がわからないために家から出るのを嫌がったお母さまだったが、鹿児島をはじめ九州各地の民謡をたくさんメイドさんに教えて毎晩一緒に歌うなど、元気を取り戻して楽しく暮らし、4年後に鹿児島に帰って行った。

新しい家に引っ越す前に、夕子さんはガイドとして勤務する会社に、「主人が探しに来るだろうから、夕子は辞職した、どこに住んでいるのかわからないと言うように」頼んでおいた。会社の同僚、上司、友人たちは、顔や腕のあちこちに殴られた青いアザのまま仕事をする夕子さんを見ていたので、夫から逃げようとする夕子さんにとっても協力的だった。

次の日に、慌てた英意氏が会社にやってきて夕子さんの居場所を尋ねた

が、社長からバスのドライバーさんまでみな口をそろえて「彼女は辞めたよ」と答えたそうである。

ガイドの仕事で飛び回っていたものの、別居後は穏やかな生活が続いた。もう痛い思いをしなくてもいい、というのが別居後の正直な気持ちだった。息子は兵役から戻って、ハワイ大学に進学した。母親思いの優しい一人息子のことを話すときの夕子さんは、とても穏やかな表情を浮かべる。

一生懸命勉強してくれたようです。仕送りもしたんですが、アルバイトをしていたようで、仕送りにはほとんど手を付けずに持って帰ってきました。

息子はハワイから帰国すると、日系の大手製造業に就職した。夕子さんが小さい頃から息子に日本語で話しかけるなどしていたため、日本語の日常会話には不自由せず、日系企業の採用試験に合格したのである。

そんなある日、夕子さんは友人の結婚式に招待された。新郎新婦とその両親が並んで立っているのを見て、「息子が結婚するときにこんなふうに両親そろってご挨拶をしたい、そうしないと息子が可哀そう」と強く思った。

友人が探してくれて、英意氏の居場所はすぐにわかった。夫は家出した夕子さんと息子を探すために、仕事どころではなくなってイギリス系の会社を辞めてしまい、その後は探すのをあきらめて、東海岸のホテルのマネージャーになっていた。

久しぶりに会った夫に、

あなたね、ギャンブルも女遊びも辞めて、息子のためにいいお父さんになってくれるんだったらもう1回やり直してもいい、と言うと、主人は「わかった、OK、OK」って言ったんです。それでしばらくしてから主人が家に来て、また一緒に暮らすことにしました。

でも息子が言ったんです、「ママ、どうしてあの犬を連れて帰ってきたの！」って。びっくりして息子に、あなたのお父さんは犬なの、お父さんに謝りなさい、って言ったら、「ごめんなさい・・・」と息子は言いました。

それから主人はいいお父さんになりました。月給1200シンガポールドルでマンションの管理人の仕事をするようになり、初めて家にお金を入れたんです、初めてです。バス代以外の月給をほとんど家に入れたから、私は毎日お弁当を作ってあげました。やった、勝った、ざま見ろ、という気持ちもあったんですよ。

イギリス系企業で6000シンガポールドル以上の月給をもらい、「飲む、打つ、買う」の生活を送っていた英意氏は、晩年はいい父親になってつましい生活を送ったようである。その後病気で4年ほど寝たきりの生活を送って、2013年に他界された。

変貌するシンガポールの街並

1967年夕子さんが仕事を探すために乗ったバスにはドアがなかったし、窓は開けばなしで閉めることが出来ず、雨の日には車内は水浸しになった。

最初の自宅があったパシパンジャンには、海沿いにずっとマレー人カンポンがあってなんとなく情緒がある場所だったが、1980年代になると、カンポンはもうどこにもなくなった。朝タクシーに乗った時にあったビルが夜はもうないことがあって、「タクシーが道を間違えたかと思うほど」、街並みも大きく変わった。当時は「2分間に1世帯の割合で公団住宅が建つ」と言われ、あちこちの道端に建設用レンガが山積みになっていた。

激しい戦闘が繰り返され、多くの兵士が亡くなったゴム園もどんでん姿を消した。

ゴム園がなくなっていくのは、自分の心が踏みにじられるようでした。でもシンガポールが発展するんだから、これでいいのかと思うようにしたんです。

シンガポールが発展していくのは、自分のことのように嬉しかった。1980年代の「日本に学ぶキャンペーン」のときは、リー・クアンユー首相は「日本が100年かけてやったことを自分たちは10年でやる」と言った。若者をそういう気持ちにさせた。みんなが心ひとつになったことが大きいと思う。1つの家族さえまとめられない人もいるのに（笑）。

1990年代になると、元兵士が亡くなったり年老いたりして来られなくなったために、慰霊に訪れる元兵士のための史跡ツアーはなくなった。夕子さんは次第に駐在員やその家族のためのツアーを行うようになった。ただ、その大半は歴史をほとんど知らず、「からゆきさん」という言葉も知らない。

ひたすらシンガポールのことをもっとよく知って欲しいという気持ちでガイドしています。自分は多くのシンガポール人に助けられて生きてきました。その人たち一人一人に恩返しはできませんが、ツアーに参加した皆さんがシンガポールの国や人をもっと好きになってくれたら、これほど嬉しいことはありません。

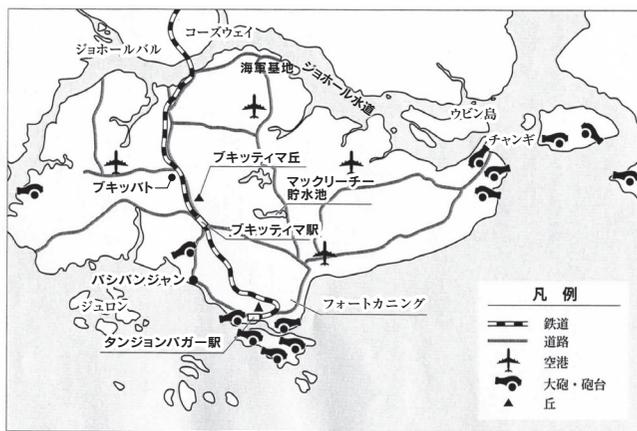
ツアーの内容も少しずつ変えていった、史跡めぐりだけではなく、仏教寺院やヒンドゥー教寺院、イスラム教寺院を回るツアー、それも中心街にある有名な大きな寺院だけではなく、市の中心から離れた郊外にある小さな寺院を巡るツアーも入れるようにした。仏教とヒンドゥー教の勉強も必死でやった。風水の説明を専門家にしてもらい、その後に風水占いをして建てられたビルなどを見て回るツアーも企画した。

80歳を超えた現在では、史跡ツアーは特別依頼があった時にだけ行い、孫2人の世話の傍ら、シンガポールの小学校で戦争についての話や、在シ

シンガポール日本人を対象とする講演会などで1960年～70年代のシンガポールの暮らしについて話をするようになっていく。

「名物ガイド顔夕子」の史跡ツアーの主な場所

「名物ガイド顔夕子の史跡ツアー」は、戦前から戦後にかけて日本人がシンガポールに残してきた足跡を辿り、戦争で散って行った兵士の声を紹介し、参加したお客さんに戦争の愚かしさを伝える。自ら聞いて必死でメモを取った元兵士たちの声と表情を伝えるときの夕子さんの後ろには、本当に兵士たちが立っているかのように錯覚してしまうほど、臨場感あふれる説明が行われる。



1937年のシンガポール

① 激戦地ブキッティマ三叉路跡

シンガポールは、日本軍が侵攻した1942年2月8日からわずか1週間で陥落し、イギリスは無条件降伏をした。大英帝国の歴史のなかでもっとも大きな屈辱として、その降伏は記憶されている。ただ、わずか1週間とはいえ、シンガポールのあちこちで激しい戦闘が繰り返された。シンガポールの中心にある小高い丘ブキッティマ攻防戦はそのひとつで、ここにイ

ギリスの武器貯蔵場所とマックリーチーという大きな貯水池が近くにあったこと、さらにここから市中心部への幹線道路が走るという交通の要衝だったからである。1942年2月10日夕方に日本軍は二手に分かれてブキッティマに侵攻、ブキッティマ防衛を任されていたオーストラリア軍が日本軍の行く手を阻むべく激しく戦ったものの、夜中には日本軍はブキッティマを奪い取った。この攻防戦で、シンガポールの戦いはほぼ終わった。

夕子さんのツアーは、まず今は高級住宅街になっているブキッティマ道路周辺から始まる。シンガポールで唯一世界遺産に登録された植物園の近くにある旧ラッフルズ学院（現在はシンガポール国立大学ブキッティマキャンパス）を車窓から見て、「日本占領中はイギリス軍捕虜を一時的に収容した場所、その後は一時裁判所にもなったのです」という説明をする。

1940年代は三角州になっていてブキッティマ三叉路と呼ばれた場所が、攻防の激戦地だった。イギリス軍はシンガポールの地理を熟知していたが、日本軍は手探りでここを進み、丘の上からと道路の後ろからイギリス軍の集中攻撃を浴びた。ブキッティマ三叉路で戦った日本兵は「銃を構える時間もなかった」という。小さな溝や小川は日本軍の遺体で埋まった。

夕子さんの会社が集まっていた元兵士によると、1942年2月10日夜、シンガポール攻略作戦の最前線にいた第18師団（九州の久留米で編成され



激しい戦闘で燃え上がった
ブキッティマ三叉路の石油タンク
(陸上自衛隊小倉駐屯地史料館所蔵)



1942年3月26日、ブキッティマの丘の上で戦闘の様子について報告を受ける
山下奉文司令官(左端)
(陸上自衛隊小倉駐屯地史料館所蔵)

た部隊)は、ブキッティマ三叉路で敵の激しい攻撃を受け、全滅の覚悟をした師団長牟田口廉也(むたぐちれんや)は「今夜が最後だから」と、部下が止めるのも聞かずに最前線に飛び出して兵士一人一人の手を握ったという。牟田口師団長はその時に負傷したものの、そのまま兵士たちと南に進んだ。翌日イギリス軍に属する義勇軍の何人かが戦意を喪失して座り込んでいるのを見ながら南に進み、その後、キャセイビルに日章旗が上がっているのを見て、勝利を知った。

なお、イギリスのパーシバル司令官(中将)と部下3人が降伏をあらわす白旗(テーブルクロスだった)とユニオンジャックを掲げながら、日本軍の山下奉文司令官(中将)の待つフォード工場に向かって歩いたのも、このブキッティマ道路だった。

② ブキッバトの丘 (Bukit Batok Hill)

1942年2月シンガポールを攻略した直後に、日本軍は日本兵戦死者を祀るための小さな神社と慰霊塔を連合軍の捕虜たちを使って、ブキッバトの丘に建立しようとした。捕虜たちの間に強い不満が起こったが、山下司令官は連合軍戦死兵の十字架を建てることも許可、捕虜たちの不満を宥めた。

ガイドを始めた頃、タ子さんはこのブキッバト慰霊塔跡にも元兵士などのお客さんを連れて行きたいと思ったが「ブキッバトの丘に登るには、3段階に分かれたそれぞれ25段の階段を上らなければならない。シンガポール攻略の主力



ブキッバトの慰霊碑(記念碑)と見学する人々
(タ子さん提供)



2019年9月ブキッバト慰霊碑(記念碑)に「史跡ツアー」参加者を案内するタ子さん
(写真中央、タ子さん提供)

は第25軍 3 個師団なので、そんな階段を作った」と、彼女の旅行会社によく来ていた元脱走兵が教えてくれたが、そんな階段があるのではバスでは行けないので、歩いて階段を探した。歩いても歩いてもなかなか階段が見つからず苦勞した。以前の道は取り壊されていて、戦後に新しく作られた道をようやく見つけたが、階段は広場の上にあって25段よりももっと長い階段だった。

敗戦時に神社も慰霊塔も日本軍の手で爆破され、現在は石段の中ほどに銅板の記念碑が残されているだけである。碑文には英語、マレー語、華語、タミル語、日本語で、以下のように記されている

「ブキバトの慰霊塔 1942年、日本軍は『昭南忠霊塔』の建立を連合軍捕虜に命じた。

日本軍戦死将兵を祭るこの慰霊塔は、先端を円錐状の銅で覆った高さ約12メートルの木造の塔であった。

また捕虜らは英軍連合部隊戦死将兵の霊を弔う高さ約3メートルの木造の十字架を昭南忠霊塔のうしろに建てた。『昭南忠霊塔』は1945年、連合軍がシンガポールに上陸する前に日本軍によって取り壊された」

苦勞して道を見つけて以来、ずっとここはツアーの訪問地になっている。現在は、丘の上にはテレビアンテナが建っていて、階段は朝夕の人気のジョキングコースである。「平和になりました」とタ子さんはお客さんに微笑むのである。

③ フォード工場跡

(Former Ford Factory/Surviving the Japanese Occupation)

1942年2月15日、フォード自動車工場（東南アジア初の自動車組み立て工場として1941年10月に操業開始したが、日本軍侵攻ですぐに操業停止）の役員室で山下奉文司令官とイギリス軍パーシバル司令官の間で降伏条件が話し合われた。山下は即時の無条件降伏を要求、応じない場合は攻撃を再開すると脅し、「イエスカノーか」と強く迫った。パーシバルは無条件

降伏を受け入れて降伏文書に署名した。イギリスが無条件降伏を受け入れるのは大英帝国の軍事史上初で、最大の屈辱であった。

ブキッパトの丘の下にある工場は戦後に操業を再開し、1980年に工場が閉鎖されて以後1990年代末までは無人の廃墟だった。



現在のフォード工場跡

この荒れ果てた建物が、イギリス軍降伏の署名をした歴史的なフォード自動車工場跡だということ全く知りませんでした、近くに住んでいた日本人が「変な建物がある」と教えてくれて、その人と一緒に行ってみました。入口前は切れた電線が渦巻いていて、幽霊も怖くて中には入れないだろうほど荒れ果てて、崩れ落ちる寸前でした。窓ガラスもすべて落ちて、窓枠も無かったです。中を覗いたら、「有名なイエスカノーかの会談場所」とわかりました。

ただ、その後ガイドとしてお客さんを案内したときも、未整備だったので入口近くまでしか行けなかったという。

1997年に政府が建物と敷地を所有することになり、2006年に戦争博物館（Old Ford Factory）として整備され、2017年2月15日に改装を終えて、現在の名称として再オープンした。降伏交渉の写真を含めて日本軍政時代のさまざまな写真や地図などが展示されている。

④ ジョホール水道（Johor Strait）

1923年、ジョホールとシンガポールの間にあるジョホール水道（ジョホール海峡とも呼ばれる）を結ぶ橋が完成した。1942年にマレーシア側から侵攻した日本軍がジョホールの水源を止めたためにシンガポールへの給水が断たれ、イギリス軍は投降を決定したと言われる。この橋が現在のコーズウェイ第一リンクで、ジョホールからシンガポールへ原水を運ぶ水道



山下の司令塔（中央の建物）

管2本、シンガポールからジョホールに浄水した水を運ぶ水道管1本もここを通っている。

1970年代、慰霊に来た元軍人のお客さんに何とかジョホール水道を見せてあげたいと思った夕子さんは、当時のイギリス軍の軍港敷地内にジ

ョホール水道に行く小さな道を偶然に見つけた。その道をバスを通るときに守衛に止められるかと思ったが、何も言われなかったし、写真も撮らせてくれた。

その道を抜けると、ジョホール水道と対岸のジョホールがすべて見えた。山下が仮司令所としたジョホールのサルタン（マレー諸州の世襲の王）の居城の塔も見えた。山下はこの塔から双眼鏡でシンガポールを眺めながら、作戦を練ったと言われている。

今でもその道を見つけたのは、亡くなった軍人が導いてくれたからだという気がします。

と、道を偶然に見つけた時のことを夕子さんは振り返る。

当時は日本の旅券は「1回旅券」だったため、ジョホールに渡る時はシンガポールの日本大使館で許可を取らなければならなかったが、大使館の担当者によく意地悪をされた。担当者がお客さんに「このガイドがお金を稼ぐために、みなさんをジョホールに連れて行こうとしている。どうしても行きたいですか？」とわざわざ尋ねたという。

その担当者はシンガポール華人の高齢者でした。もしかしたら、日本占領中にひどい目にあったのかもしれないと思います。

日本軍の占領の記憶を、心にも体にも鮮明に刻んで生きる多くのシンガポール人がいた時代、戦争の愚かしさをお客さんに知ってもらうための夕子さんのツアーとはいえ、日本人であるためにこのような意地悪もされたのである。



日本人墓地に倒されたまま保存されている渡河記念碑。

碑の下から生えた熱帯の植物が、碑に大きな割れ目を作ってしまった。

⑤ 渡河地点

渡河地点とは、1942年2月8日、日本軍がジョホール水道を渡河してシンガポール島へ上陸した最初の地点で、山下奉文署名入の「ジョホール水道 敵前渡河 戦跡記念碑」という高さ2.6メートルの碑が建てられた。戦後は誰かが隠してしまったり、行方不明になった。1982年10月ジョホール水道河畔のジョホール州リド地区で、現地の人が公園を建設中、二つに折れ地中に埋もれていた記念碑を発見した。ジョホール日本人墓地にこれを立てるのではなく、倒すことで保存するという許可を1983年9月にジョホール州政府からジョホール日本人会が得て、現在に至っている。なお、ジョホールの海岸沿いにはその土台だけが残されていた。

誰かが隠したのは、渡河記念碑を何とか残したいと思ったのではないかと。「雨ざらしのために、文字が薄くなってしまったので、屋根を作ったかどうか」とジョホール日本人会に提案したところ、文字を隠したいので雨ざらしにしているのだという返事でした。以前はもっと文字が深く掘られていたのですが、今は二つに割れてしまいました。ジョホールの日本人会にとっては、消してしまいたい歴史なのだと思います。

⑥ バトルボックス (Battle Box)

フォートカニングというシンガポール南部の小高い丘にあるバトルボックスは、シンガポール防衛のために1930年代に作られた地下9メートルにある要塞である。司令室の役割を担ったのは、マレー半島を日本軍が南下



バトルボックス入口

してシンガポールに侵攻した1942年2月7日から2月15日にかけてのことで、これを食い止めるべくパーシバルを中心とした司令部がこの要塞に設けられた。日本軍への降伏を決定したのもこのバトルボックスの司令室であった。

もともと、日本占領直後にバトルボックス入口は閉鎖され、ほとんど忘れられていた。1988年地元の新聞記者が中に入ってその存在を明らかにし、改修と保存を訴えた。数年間の改修を経て、司令室、無線室や暗号室、空気浄化室などいくつかの部屋が公開され、重要な部屋では蝋人形によって当時の様子が再現されており、写真や当時の地図などが展示されている。ただ、長い間閉鎖されていたために、多くの部屋が荒れ果てて、何の目的で使われたのかわからない部屋もある。

夕子さんはガイドを始めてしばらくしてから、バトルボックスの存在を知ったが、閉鎖されていたし、怖くて入れなかった。整備された後、お客さんを案内したときも薄暗く、もの悲しい雰囲気なので、奥まではなかなか行かず、入口付近で説明をすることが多かったという。現在は、バトルボックスが主催するガイドツアーに参加しなければ、中に入ることはできない。

⑦ チャンギ刑務所 (チャンギ博物館、Changi Museum)

シンガポールで作られた刑務所や収容所の中で、最も多くのイギリスやオーストラリア、ニュージーランドの連合軍兵士捕虜とヨーロッパ系市民が収容されたのが、チャンギ刑務所である。刑務所内であっても、彼らは花を植え、スポーツ大会を開催し、子どものために交代で勉強を教えた。チャンギ刑務所は2001年にチャンギ博物館となり、収容された捕虜や市民の生活の様子や手紙や絵などが展示されている。

日本軍の敗戦とともにチャンギ刑務所に収容されていた連合軍兵士は解放され、代わり



チャンギ刑務所内に作られた旧チャペル (1988年に建て直されたもの)

にシンガポールだけでなく、ジャワやボルネオ島などからも2000人を超える戦犯容疑者の日本軍兵士が集められ、裁判で死刑判決を受けた

135人は順次処刑された。なお、日本軍によるシンガポール華人の大虐殺に対する裁判もここで行われ、上級兵士2人は死刑、現場で虐殺を指揮した上級兵士と憲兵隊の将校5人に終身刑が言い渡された。

なお、山下奉文司令官はフィリピンで米軍に捕らえられ、アメリカ軍の戦犯裁判で死刑判決を受けた。ただ、シンガポール虐殺現場の命令者や実行者のほとんどは起訴されずに終わっただけでなく、死刑判決が2人だけだったことに華人団体やマスコミは猛反発したが、イギリス軍によって反発は抑えられた。イギリスは戦後に盛んになった労働運動や学生運動への対応、日本占領時期の反日闘争によって支持を広げたマラヤ共産党への対応に追われ、華人団体の要求を「証拠不十分」として相手にしなかったのである。

夕子さんは、処刑を免れた元日本兵から刑務所内の様子を聞いた。夕子さんが心打たれたのは、監視役の若いイギリス兵たちの思いやりだった。最初は仲間を殺した日本兵を憎んでいたが、日が経つにつれて、同じような年齢の若い日本兵に同情の心を示すようになったのだという。

判決を受けてからしばらくして、監視兵が「何か食べたいものはないか、欲しいものはないか」と尋ねると、それは「明日が処刑である」という



チャンギ博物館内の展示の一部 (捕虜となった連合軍兵士の写真と手紙やメモ)

意味だった。ある兵士が「鉛筆と紙がほしい」と言った。その願いを受け止めた監視兵は、（鉛筆と紙を渡すことは禁止されていたので）最後の食器の下に小さな英語の本や聖書を忍ばせ、その本の中に短い綺麗な削られた鉛筆を入れた。ある兵士はその本の余白や奥付に遺書を書いた。それは「両親への最後の言葉ときょうだいへの言葉」でした。

「ご両親様。今日までお育て頂いた恩返しを何ひとつできずに先立つ親不孝をお許しください。でもこの命を差し出すことができ、それによって日本が救われるのであれば喜んで逝きます。妹よ、兄が戦犯になるので、嫁入りに差し支えるかと思うと心が痛んで眠れない。兄の分まで親孝行して勉学に励んでほしい。さようなら」。

多くの兵士が処刑前に書いた遺書は、どれもほとんど同じような内容だったという。それらの本は日本の家族に送られたり、オーストラリアの博物館に展示されているものもあるらしい。夕子さんは「若い人にぜひ読んで、戦争の愚かしさについてしっかりと考えてほしいと思う」と言葉を強める。

また「何か欲しいものはないか」と監査兵に尋ねられたら、「明日が欲しい」と答えた兵士もいたという。

それで、ある日私は幼い息子に「明日が欲しいと思わないか？」と尋ねたことがあったんです。息子は不思議そうに「明日は確かに来るよ」と答えたので、自分は泣いてしまい、びっくりした息子は「ママ、明日は必ず来るよ！」と慰めてくれました。

⑧ 日本人墓地公園 (Japanese Cemetery Park)

日本人墓地は、1881年に娼館やゴム園経営で富を成した二木多賀次郎（ふたぎたがじろう）が、「からゆきさん」（娼婦として東南アジアなどに連れてこられた女性たち、熊本県や長崎県のとくに天草と島原出身者が多かった）が死後に獄死者や斃馬の埋葬地に葬られていたのを哀れに思い、自

己所有のゴム園の一角に墓地を作ったのが始まりで、その後に2人の日本人も協力してイギリス植民地政庁から墓地建設の許可を得て、新たに墓地を作った。その後、「からゆきさん」だけでなく、他の日本人民間人もここに埋葬されるようになった。



「からゆきさん」のお墓

さらにその後、第二次世界大戦中に戦死した日本人兵士やチャンギ刑務所で処刑された戦犯も埋葬され、約3万平方メートルという広大な敷地に約1000基の墓が置かれている。1947年まで埋葬地だった日本人墓地公園をシンガポール日本人会が管理して墓地公園（メモリアルパーク）としたのは1987年のことで、墓地の整備が本格的に行われるようになったのはこの頃からである。

夕子さんがガイドを始めた頃、墓地入口に「日本人墓地」と書かれたアーケードはあったが、中は見渡す限り草茫々の荒地そのものだった。1人で草むしりをしたこともあったという。近くに住む人が自分の家を建てるための足場にするために墓石をもって行ったり、墓地の中で動物を飼ったりしていたとも聞いた。それくらい荒れ果てていた。

ある日、日本人墓地で草むしりをしている鹿児島出身の男性に会ったこともある。どういう方かよくわからないが、戦没者の慰霊碑近くに通り道を作るために草むしりをされていたので、「ご家族を戦争で亡くした方かもしれない」と夕子さんは考えている。

お客さんを日本人墓地に連れて行くときは、墓地の中は赤土があちこちむき出しだったので、泥だらけの靴でバスに帰ってくるお客さんのためにバスの中に新聞紙を敷いて、その上で泥を落としてもらった。

夕子さんは、日本人墓地公園を案内するとき「からゆきさん」との偶然の出会いも語る。

結婚直後は寂しくて日本語が聞きたいと思っていたが、日本人に会うことはなく、よく自宅近くのパシパンジャンの海岸で日本の歌を歌ってい

た。そのときに「からゆきさん」と出会った。

ある日歌っていたら、後ろから日本語で「はよう日本に戻らんか」と声をかけられたんです。後ろに背の小さいおばあちゃんがいて、嬉しくて飛びつきました。おばあちゃんに「何か食べてください」と10シンガポールドルを渡したら「自分は乞食ではなか！」と怒られた。何とかして受け取ってもらおうといろいろ言うと、「じゃあ車を洗うから」と受け取ってくださった。本当に翌朝に自宅に洗車に来てくれた。何日か後にお茶を勧めたら「このお茶碗があまりに綺麗で、自分は汚いから」と湯呑茶碗を使わずに、受皿でお茶を飲んだんです。

おばあちゃんに、（当時は「からゆきさん」のお墓だと知らなかったの）で日本人墓地にたくさんある小さな女性のお墓のことを尋ねた。おばあちゃんに「あの人たちは自殺した人？」と聞いたら、「自殺する自由すらなかったばい！」と言われました。いろんな人に聞いて、その人が熊本出身の元「からゆきさん」で、帰国しても帰る場所がない人だと後で知りました。

ずっと後になって、妹の車で天草や島原を回ったことがありました。貧しい地域かと思ったら立派な瓦葺きの家が並んでいたの、彼女たちの送金でこんな家が建ったのかもしれないと思い、シンガポールに戻って墓地に眠る「からゆきさん」に、「あなたたちが送ったお金でみんな立派な家に住んで、幸せな暮らしをしているよ、安心してくださいね」と大声で呼びかけました。

元「からゆきさん」が自分は汚いからと湯呑茶碗と使わずに、受皿でお茶を飲んだことに、夕子さんは彼女の深い悲しみ、苦しみを感じ取った。家族のため、兄や弟のために、異国の地で彼女たちは「からゆきさん」になり、文字通り体を張って生きて故郷に仕送りをし、二度と故郷を見ることなく死んでいった。

彼女たちを家族のためという「美德」の下で娼婦として異国に送り込んだ当時の日本社会が「汚い」のであって、彼女が「汚い」のでは全くない。彼女たちの苦しみを少しでも軽くするために、夕子さんは彼女たちの出身地を回って、「あなたたちが送ったお金でみんな立派な家に住んで、幸せな暮らしをしているよ、安心して下さいねえ」と呼びかけたのである。

「からゆきさん」という言葉を知らない人が増えてます。平和な時代になったのだから、それはそれでいいとは思のですが、「わが子を家族のため、あるいは口減らしのために売るような時代があったことを知しましょう、どれだけの女性たちがどんな思いであそこに眠っているのかを知りましょう、ここに来る船旅の途中で亡くなって、海に捨てられた人もどれだけいたことかを知りましょう」とお客さんには言うんです。知らないことは罪です。自分がそうでしたから。

なお、戦前、都心のブギス地区のミドルロード周辺には日本人街があった。最盛期には90軒以上の娼館があり、1920年に制度が廃止になるまで「からゆきさん」が住んでいて、周辺には日本人経営のホテル、レストランから新聞社まで様々な施設が集まっていた。現在はほとんどの施設が取り壊されたが、スタンフォード・アートセンターに変わった旧日本人小学校など一部の建物は現存している。

⑨ 血債の塔

「肅清」あるいは「大検証」と呼ばれる華人大虐殺の犠牲者慰霊塔で、正式には「日本占領時期死難人民記念碑」であるが、「血債の塔」と呼ばれる（134ページの写真参照）。日本軍は占領直後に華人の「抗日分子」摘発を行った。東南アジアに居住する華人は満州事件（1931年）以降、日本の中国大陸侵攻に対して大規模な抗日救国運動を展開し、巨額な援助物資を祖国中国に送っていた。シンガポールはその根拠地だったのである。

ただ、誰が「抗日」で誰がそうでないかの区別がつかないため、18歳か

ら50歳の華人男性全員を数箇所を集め、3日間にわたって憲兵隊による検証が行われた。検証の基準は曖昧で、例えば、英語が話せると判断されれば「抗日分子」と分類され、トラックに乗せられて東海岸で銃殺されるか、海で溺死させられた。この大虐殺の犠牲者は、6000人とも4万人とも言われている。1967年2月、東海岸で発見された600体の遺骨を納めた「犠牲者慰霊塔」が市の中心部に設立された。犠牲者の圧倒的多数は華人であったが、「占領期に犠牲になったすべての人々のため」として、華人、マレー系、インド系、その他というすべての国民を表わす4本の柱からなる慰霊塔となった。

この塔が建てられたのは、私がここに来る5か月ほど前のことで、塔のことは何も知らなかった。当時は、ものすごく大きなテーブルの上に白いお箸を4本立てたような塔で、周りには何にもなかったんです。今は周りに高いビルがたくさん建っていて、塔は目立たなくなってしまいました。

あの塔を「目障りだからどこかに移せ」と言った日本人がいたらしくて、それが地元の新聞に載ったことがありました。人の痛みを知らない日本人の驕りで、それを聞いたときは本当にびっくりしました。何の罪もない大勢の人を殺したことを、日本人は絶対に忘れてはいけないと思います。塔の前を通る時は「ずっと今のままの塔でいてね」と祈るような気持ちになります。あの前で日本の若い新婚さんや修学旅行の学生がVサインして写真を撮っているが、いいのかなと思います。

でもそれはガイドが悪い。私はガイドに「日本軍に何万人も殺されたことを、ちゃんと話をしてください」と頼むのですが、ガイドが「高いお金を払ってきているお客さんに、そんなことは話せない」と言う。広島と長崎の原爆投下と同じで、日本国民はみんな知っていて欲しいと思います。私がガイドをする限りは、語り続けていきたいと思っています。

「日本人として許してもらって生きているから」

夕子さんは、筆者の長いインタビューの最後にシンガポールへの思いを語った。

海を渡ってここに来て51年。こんなに長くいるとは思わなかった。シンガポールのことを知っていたら、来なかったと思います。

でも、日本と歴史的なつながりがあったからこそ、自分はこんな仕事をさせてもらっている。「自分はここでやることがある、だからやってみよう」と思う気持ちにさせてくれたのがシンガポール。自分を生き活きとさせてくれたのがシンガポール。

日本人として許してもらって生きているから、何かシンガポールに役に立つことをしたい、世のため人のために生きたい、ずっとそう思ってガイドをしてきました。自分はいいい体験をさせてもらった、幸せ者。体験を笑って話せるというのは最高。みんなが味わえないことを味あわせてもらった、時代とみんなに感謝、オヤジ（英意氏）に感謝です。

Reprinted from

KITAKYUSHU SHIRITSU DAIGAKU HOU-SEI RONSHU

Journal of Law and Political Science. Vol. XLVI No. 3 / 4

March 2020

GAN Yuko : A Famous War Memory Tour Guide in Singapore
— I am allowed to stay here even though I am Japanese —

TAMURA-Tsuji Keiko